第５回　「水都」「天下の台所」大坂と北前船の関係の変化

はじめに

大阪に淀川と大和川が運ぶ土砂で大地の姿は絶え間なく変わり、かつて難波津という国際港がありましたが消え、戦国時代の末に歴史の表舞台に姿を変え新しく登場しました。

大坂の陣によって天下の統一を終えた徳川幕府の手によって、大坂の町は新たに整備され、縦横無尽に走る運河網によって「水都」として船運が機能し、江戸との間は菱垣廻船等で結ばれ、大坂が「天下の台所」と呼ばれることとなりました。18 世紀後半には大坂から、瀬戸内海、日本海を経て蝦夷地まで往復する「北前船」の起終点となり、国内の豊かな市場の形成に寄与するまでになりました。しかし、明治時代の開港は兵庫が選ばれ、結局「港都」になれず「水都」も衰退しました。その背景を歴史から訪ねてみましょう。

大阪湾の誕生と河内湖

大地の変貌を、大阪湾が誕生した歴史から始めてみましょう。

氷河期の時代は海面が下がり、大阪湾は外洋とは繋がっていない大阪湖でした。

6000 年前の地球の温暖化で海面が 6m ほど上昇した縄文海進で、海水が入り、大阪湖と瀬戸内海、太平洋がつながり、大阪湾と河内湾の内湾に分かれました。それを区分したのが泉州丘陵の先の活断層の割れ目から隆起した「上町台地」です。東西方向の圧縮力により形成された南北方向の上町台地は、大阪湾に面した海岸が波で削られて図 E-5-1 に示す細長い半島になりました。

図 E-5-1　6000年前の大阪湾と河内湾

（出典：大阪市　大阪陸地の変遷 9）

図 E-5-2　1800年前の河内湖の誕生（出典：大阪ブランド資源報告書（大阪ブランドコミッティ、2006 年））

約 1800 年前には、河内湾は流れ込む淀川や大和川の土砂で埋まり、海水面が減少するだけではなく、上町台地の北側の先端部には、図 E-5-2 に示すように淀川により運ばれてきた砂や石が波で吹き寄せられ、「砂州」が北へ延びきって、河内湾の出口が狭くなり、淡水の内湖の「河内湖」になりました。

上町台地の西側の浜は波が速く険しい「浪速（なみはや）」や「難波(なんば)」と呼ばれました。一方で、上町台地の半島を回り込んで「河内湖」に入ると、北側は流量の大き

な淀川が大河川で荒々しく流れている一方で、南側は大和川が穏やかに流れ込んでいただけで、波の穏やかな浜が利用できました。小さな船に乗り換え、河岸において水夫が船を引っ張ることで、奈良盆地に入ることができました。

瀬戸内海の東の端に成立したヤマト王権

3 世紀に奈良盆地を中心として周辺を支配したヤマト王権が、4 世紀末には日本列島の大半を治める統一王権は「大和朝廷」と呼ばれることとなりました。ヤマト王権の支配地とした奈良盆地は、盆地を囲む山々が鉄壁の防御壁となることと、建築資材と同時にエネルーギーの供給源となり、奈良盆地の平地では米や様々な農作物を収穫でき、多くの人々が安定した暮らしができました。それだけではなく、奈良盆地から流れ出す木津川や大和川を使って船で下れば、河内湖、瀬戸内海の東端の大阪湾に出ることができました。すなわち、瀬戸内海の東の端に成立した国であることで、着実に権力を集中できたのでした。

ヤマトの国が国内を平定した時代の特徴として、畿内は大和朝廷の一帯の地域として見なされ、その都の設定場所は、奈良盆地の中の飛鳥地域が中心となりました。5 世紀頃から朝鮮半島の新羅や高句麗、百済と外交や交易関係ができ、中国（当時は南朝時代の宋（420－479））からも、貢ぎ物や使者の到来があったことを当時の宋書に多く記載されています。それは、中国や朝鮮を結ぶ交流軸が九州を経過し、瀬戸内海を通り、大和川を遡上し、奈良盆地の飛鳥地域の終着地点になったからでしょう。

難波宮と難波津の時代

都は飛鳥にあり飛鳥京と呼ばれましたが、天皇毎に住まいと政治を行う宮が繰り返し遷宮された時代でもありました。第 14 代応神天皇、第 15 代仁徳天皇が活躍した時代には、都が大阪湾沿岸の河内平野に遷都され、難波王朝と呼ばれた時代もありました。

河内湖の南に大和川等からの土砂が堆積してできた河内平野の北側は、大雨による増水時の洪水被害を沿岸にもたらしました。そのため仁徳天皇が上町台地を避け北側の砂州でできた柔らかい地盤を掘削して「難波堀江」と呼ばれる運河を開いて河内湖の湖水の逃げ道としました（『日本書紀による』）。その運河の間にできた潟湖に「難波津」と呼ばれるみなとが誕生することとなりました。難波津は瀬戸内海の東端の大阪湾に面し、大和川を利用して奈良盆地に繋がる海外との交流の要衝になっていきました。

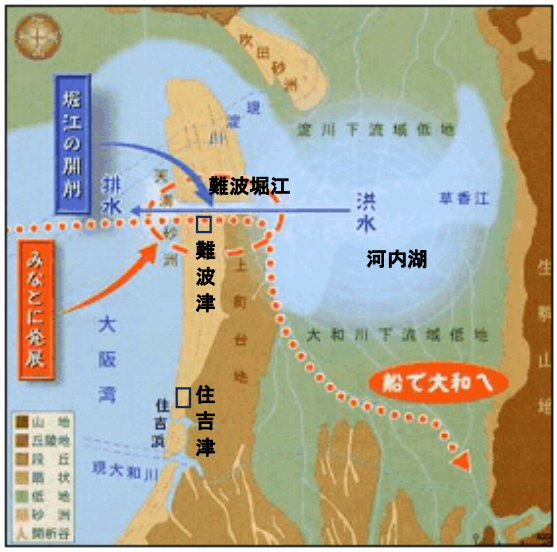

図 E-5-3　難波津と難波堀江の位置
（出典:大阪湾環境データベース）

難波津ができたことで、当時の政治や文化の先進国であった隋と唐に学ぶため、遣隋使（600 年から 615 年までの 5 回）や遣唐使の使節（630 年から 838 年までの 19 回）が派遣されました。大阪の住吉大社近

くの住吉津から出発し、大阪湾に出、難波津を経て瀬戸内海をから玄界灘に出る航路がとられましたた。遣唐使や唐からの使者は難波津で上陸し難波京に入り、さらに陸路または大和川系の水路により飛鳥京や平城京に入ることができました。中国から、仏教の経典や薬、楽器だけではなく政治制度（律令制など）が持ち帰られたのでした。

都であった難波京の期間は僅かで、その後も遷都が行われますが、飛鳥宮の副都として運用されましたが、686 年に宮の建物が消失し、副都としての役割を失ってしまいました。

しかし、難波津は瀬戸内海に面した港として、唐に繋がる海路の出入口としての機能を果たすため、聖武天皇により平城京遷都になった後の 726 年に難波津に離宮を建て、その後の平城京の副都としました。ただし、天変地異が起こる度に、都は一時的に、平城京から別の地に遷都がなされますが、その期間は暫定的で、再度平城京に再遷都され政務が行われました。この中で難波京への遷都は 744 年の 1 年間ありましたが、その後は、都が平城京にある中で、その外港あるいは副都として、人、物、情報の窓口として重要な機能を担い、奈良という特異な地形の中での政治と経済を支えることとなりました。

長岡京、そして平安京へ遷都

しかし、奈良盆地は狭く巨大な都を置くにはふさわしくないとして、桓武天皇により平城京を離れて、784 年に淀川沿いの長岡京へ遷都がなされました。

遷都した理由として、仏教や藤原一族などの勢力拡大の回避による中央集権体制の確立が主な理由ですが、本論の関係では、内外との交易関係を増加させるためと言う理由も挙げられます。長岡京は、都として人口増を受け入れる広い面積が確保できました。さらに、淀川という動脈的な河川により瀬戸内海に繋がることと、さらに桂川、鴨川、宇治川、木津川が合流する巨椋池の近くにあり、宇治川の上流の瀬田川で繋がっている琵琶湖から約 20km の陸路を経れば日本海の敦賀の湊に達することができるからでした(図 E-5-4)。つまり、太平洋側と日本海側の各地への船運交流の中心地になれるからでした。

図 E-5-4　日本海と太平洋繋ぐ水路

（ 出典:宝島新書『カラー版　地形と地理でわかる京都の謎』）

具体的に図 E-5-5 で説明すると、平城京への主要水路である大和川は、河内湖が淀川（水域は琵琶湖を含む 8,240 ㎢）と大和川（同 1,070 ㎢）が運ぶ土砂で消滅し、大和川は上町台地を遠回りして大阪湾に出なければならなくなっています。また、淀川は 785 年に和気清麻呂によって、淀川と別の水系であった神崎川を結ぶ三国川を開削したので、神崎川を経て大阪湾に繋がりました。神崎川の河口は摂播五泊の川尻泊と言われ、平安京に遷都後に外港となる大輪田泊から、神崎川を経て淀川に繋ぐ大水路ができあがりました。

遷都の際に、難波津の大極殿などの建物が長岡京に移築され、副都としての地位も喪失しただけではなく　国際港であった難波津は河内湖の消滅とともに、港として機能不全となり、その地位は歴史の中から消えていくことになりました。

遷都された長岡京ですが、その後 2 度も淀川水系からの洪水の発生があり、巨椋池から鴨川に沿って約 3km の平安京へ 10 年後の 794 年に桓武天皇により再度遷都されました。

新たに都となった平安京は、古代国家の貴族による律令体制という政治の時代から、その後の武家支配の実質上は幕府政治が行われる鎌倉時代、室町時代、安土桃山時代、徳川時代の終わりまで 1000 年以上の長期にわたり、天皇が政務をした日本の「都」としての機能を維持することになっていきました。それを可能にしたのは、淀川と琵琶湖の水運の利便が海外の国との外交を担保できたからでした。また、京の「都」の外港の役割を大輪田泊、後の兵庫津が果たすことになりました。

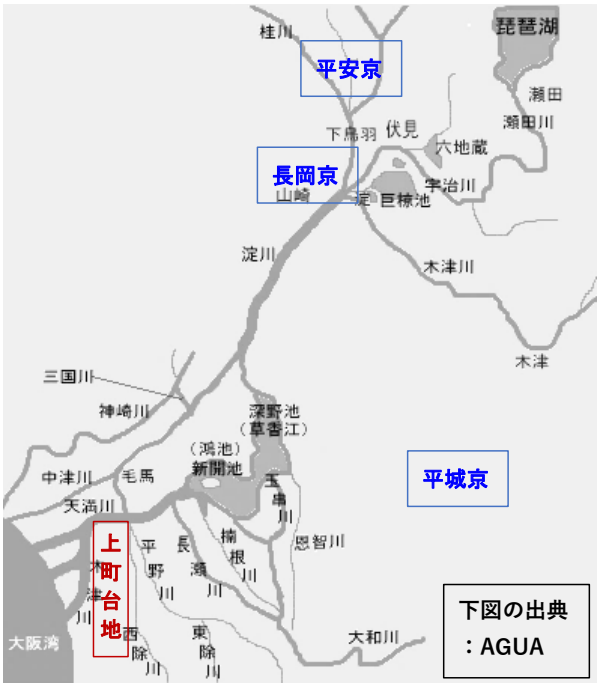

図 E-5-5　８世紀頃の淀川と大和川の水系

豊臣秀吉による大坂城の建造

平安京遷都以来、大坂は淀川と大和川によって土砂の堆積が進み、河内湖は河内低地になり、上町台地西には海岸線が 2~3km 前進していきました。

新しい時代の始まりは、室町時代に、「上町台地」の北東角部に、浄土真宗の本願寺の第 8 世の蓮如により 1496 年に「大坂御坊」が置かれたことです。1532 年に山科本願寺が焼き討ちにあったため、1533 年に本山を「石山本願寺」に移転しました。石山本願寺は、周囲を、淀川等の水路と堀に囲まれ、「防御・戦闘性に富んだ」要塞化したものでした。本山を中心に形成された寺内町は水運交通の要衝でもあり、商人が集住する経済の中心地に発展し、人口は 2 万人以上と推測され、大坂のまちの原型となるものでした。

1570 年に織田信長はその本願寺を中国進出の拠点にしようとして、本願寺を他に移すことを要求しました。しかし、第 11 世顕如はこれを拒否したため、1580 年信長と石山本願寺との石山合戦が始まります。石山本願寺は、諸国の門徒を結集し、毛利軍の村上水軍の支援など諸大名とも手を結んで、水路を活用した守りは堅く、正親町（おおぎまち）天皇の勅令による和議により、顕如は紀伊国鷺森（さぎのもり）に退去するまで、攻略に 10 年もかかりました。

信長は周囲を淀川等の水路と堀に囲まれ、制圧に 10 年を要した石山本願寺の要塞化に着目して、絢爛豪華な第 2 の安土城を築城し、西国の大名に威厳を示そうとすぐにこの地に大坂城の築城を開始しますが、明智光秀の謀反による本能寺の変で、織田信長は自刃し、その大坂城が完成することはありませんでした。

1583 年に豊臣秀吉が、天下統一を目指して、この要害の地に目をつけ、摂津国の領主であった池田恒興を美濃国に移封し、兵庫津を含む大坂を直轄地にし、大阪城の築城と城下の建設を 4 期に分けて開始しました。1585 年に本丸が完成し、二の丸は 1588 年に完成、1594 年から城下の町を囲む惣構の堀普請工事が始まり、淀川の左右両岸の堤防(27.7km)を築かせました。1598 年から三の丸築造工事を始め、北は淀川下流の大川を、東は大和川を境とする「東惣構堀」とし、南は空堀、西は東横堀川を境とする「西惣構堀」が開削されました。1598 年には天満堀川、1600 年には阿波堀川も開削され、こうした堀川の開削によって、後の「水都」大坂の原形が整い始めることとなりました。また、築城のために集まった諸大名も邸宅の新築を始め、玉造や、天満、木津に屋敷が建設されました。こうして 1599 年、安土城を越える壮大な 5 層 6 階の、屋根には金の鯱を装飾した絢爛豪華な大天主ができ、「三国無双の城」と讃えられるほどの豪壮な城郭が完成します。本丸の築造には 1 年半、さらに 15 年の歳月をかけ、堀を二重、三重にするなど、難攻不落の大坂城を築き上げました。大阪城の城郭は、本丸を中心に、二の丸、三の丸で囲んだ輪郭式平城で、また、北、東、西が淀川という天然の堀をはじめ、2 重、3 重の掘りで囲まれていました。最大の特徴は 420 万㎡の広さは、現在の大阪城公園の約 4 倍にあたります。

新たに開かれた城下は、生玉(いくだま)・玉造・渡辺など上町台地を中心としたあたりを「大坂」といい、東横堀川と西横堀川とに挟まれた地域には計画的な街区の「船場」が建設され、町屋敷や寺を移し、「背割下水」を設置し、また、環濠のある自治都市の平野や堺の商人を招きよせて、大坂の商売を活性化させました。西横堀側以西は「下船場」とも呼ばれ、ここには阿波の商人が集中した「阿波座」、土佐商人が群居した「土佐座」ができ、城下の商業を盛んにする経営の工夫が図られました。

諸大名には人口の集中する大坂に米蔵を設けさせ、本国からの米を運ばせて売買させました。京橋の南詰には青物問屋が軒を並べる市場をつくり、北詰には鮒売仲間が近郊の川魚を鮒市場を開いて売買させ、魚商人には最初天満鳴尾町に集めましたが、やがて、靭(うつぼ)町・天満に集団移住させ生魚・塩魚を取り扱いさせました。船場の浜側には材木商が集まり、土佐座や阿波座では鰹節・藍玉などが販売されました。

豊臣政権と大坂の陣

一般には大坂城が豊臣政権の本拠地と解されますが、実際には 1585 年には秀吉は関白に任ぜられ、「豊臣」の姓を称し、翌 1586 年には関白としての職責から政庁・居館として京都に「聚楽第」を建設して移り住み、さらに関白を退いた後は聚楽第は甥の(当時関白の)秀次に譲り、京都の南郊に伏見城を 1592 年に隠居所として築城しました。1593 年に嫡男秀頼が誕生すると、本城とするため大規模な改修工事が行われ、1596 年に完成させます。しかし、直後に起きた慶長伏見地震で城は倒壊したため、1597 年に新たな城が築き直され、1598 年に死ぬまで伏見城において政務を執りました。完成した大阪城は遺子秀頼に遺言で与えられました。伏見城には五大老の筆頭として声望のあった徳川家康が残り、政治を代行することとなりました。

そして、1600 年に豊臣政権の五奉行の一人であった石田三成が、五大老の一人である会津の上杉景勝と家康の打倒を諮りました。景勝の謀反を知った家康が伏見から東海道を遡上しようとした際の隙を狙って光成が挙兵しました。美濃の関ヶ原で東軍(家康方)と西

軍（光成方）の両軍の決戦の火ぶたが切られ、東軍が勝利しました。

関ヶ原の戦いの勝利を得た家康は、事実上の政治の主導権を握り、1603 年に征夷大将軍の宣下を受け、江戸に幕府を開きました。これにより、豊臣氏と徳川氏の地位は逆転し、秀頼は、摂津・河内・和泉の 3 国 65 万石の 1 大名に転落しました。

そして、家康の些細な口実による挑発を受け、1614 年の大坂冬の陣と、1615 年の大坂夏の陣で大坂城を包囲された秀頼は自刃して、豊臣氏は僅か 2 代で消滅しました。

秀吉の大坂城建設と城下町整備の狙い

明智光秀を討ち、四国と九州を平定して新たな天下人になった秀吉は、信長の狙いであった新しい国の形を引き継ぐとともに、信長を越える威厳を持ちたいと考えたに違いありません。その象徴が、信長の死とともに焼失した安土城（経緯と理由は不明）に替わる、より絢爛豪華な大坂城の姿を全国の大名に示すことでした。

さらに、信長が執った戦略のより強力な兵力を維持可能にするため、経済力を高めることも引き継ぎました。城下に関しては、商業の自由（楽市楽座）、兵農分離の城下町の商業振興でした。現代風に言えば「規制緩和」と「減税」で、城下町の経済を活性化し、商工者のやる気を引き出し、城下に多くの人を集め、結果的に城下町を発展させました。技術や文化の世界にも、決まり事から解放され、実力主義と自由競争による進歩発達を促せば、職人たちは目覚め、新たな商品やサービスを生み出し、技術や技能の発展促進をさせることとなります。それらにより、城下には多様な商品が、自由競争で価格の上昇を抑えることができれば、購買力が上がり、消費力も上がり経済豊かな城下町となるわけです。

次には、城下の経済を活性化させるだけでなく、特定の地域を仕切っていた中世的な既得権の打破も進めています。物流を妨げる通行税（関所）の撤廃、その一つの典型としての第 3 回で紹介した村上水軍の海賊行為の禁止でした。

さらに、信長の時代から始められた「検地」は、話し合いではなく、実際に土地の面積を測り、地質などを考慮して客観的な収穫高の基準値を設定する作業でした。秀吉の時代の太閤検地で「石高制」が全国に導入されました。これは、平清盛の時代に始まった銅銭（宋銭）の輸入で、国内の貨幣の流通が中世を通じて行われましたが、中国の銅の生産が低下し、輸入する明銭が劣化し、国内の貨幣流通の秩序が崩壊したため、米を計量する枡を「京枡」に統一し、「米」を物品貨幣として公認して、標準化によって経済を活性化することを目的としたものです。

そして、忘れてはならないのが、大坂を国際的貿易・経済の中心地にしようとしたことです。信長の時代から、南蛮（日本ではポルトガル・スペインのことを総称）貿易が盛んでした。1543 年にはポルトガル人が日本に鉄砲をもたらしたことから戦国大名が強力な武器になる鉄砲を手に入れるために盛んになりました。信長は、鉄砲だけではなく、西欧の技術や知識にも関心を示し、貿易との見返りにキリスト教の布教も認めました。信長の戦略を継承した秀吉も南蛮貿易を奨励しました。輸入品の代替として南蛮人は日本から銀を求めていましたが、全国を統一した秀吉は最大の銀を産出する石見銀山（銀の搬出湊は西廻り航路の寄港地になった温泉津湊）を支配下にしたため、銀の何倍もの利益が貿易で見込め、政権の安定になると考えたに違いありません。大坂での貿易振興の目的のために、大坂城下に南蛮貿易に関わる堺の商人の移住を招請をしています。ただし、信長と違って

「伴天連追放令」でキリスト教の布教は禁止しました。それは、イエズス会が背後からキリシタン大名を援助し力を付けてきたことや、両国はアジア各地を侵略して植民地化している情報を得ていたからでした。

秀吉は残念ながら大坂城の完成の前年の 1598 年に亡くなり、秀吉が目的とした経済の活性化の狙いは、政権が徳川幕府に移り、その政権の元で再整備された大坂にあらゆる問屋等の集中で日本の「天下の台所」となったことで実現したのかもしれません。

徳川幕府による焦土化した大坂の復興

徳川時代になり、「関ヶ原の戦い」に勝利した家康が、江戸に幕府を開いたことで、政治は江戸で、経済は大坂の 2 元体制になりました。

家康の江戸の地の進出は、秀吉が小田原北条氏を滅ぼした直後に、家康に北条家の旧領の関東 8 カ国（関八州、240 万石）への国替からでした。最大の実力者でライバルであった家康を、京や大坂から遠い江戸に封じ込めたいという狙いからと考えられます。

家康が江戸の地を受け入れたのは、直属の直参で固めれば防御能力に優れていること、江戸湾の奥に立地し、将来大量の物資を輸送できる船運の便が期待できること、背後地の広大な（関東）平野は、開墾可能な耕地になることなど、先験的な視点から判断されたからでした。そのために、利根川の東遷事業、荒川や隅田川の河道工事で、船運の利便を図ること、将軍宣化の後に「公儀普請（お手伝い普請）」で諸大名に新江戸城の築造、掘割運河を巡らせた城下町の整備を進めました(詳細は第 1 部第 2 章､第 3 章で述べています)。

このような経過もあり、1615 年の大坂の陣で豊臣氏を滅亡させた後、経済の中心大坂に政治の本拠を移す考えを封じて、江戸と大坂の 2 元体制を維持することを選びました。焦土化した大坂は徳川宗家の本拠地とせず、幕府の直轄地とし、統治は幕府により大坂城代・大坂町奉行が置かれて執行されました。そのため、大阪城の再建の必要はありませんでしたが、あえて最重要課題として、西国大名に対する将軍家の抑える力を象徴するものとして、豊臣時代の大坂城を徹底的に破壊して、その上に豊臣期を超える大規模な城郭（現在の大阪城で城地面積は 1/4 に）として再建したのです。普請は外様大名や譜代大名の負担による公儀普請で行われました。一方で、経済は都市づくりを始めた江戸だけはその「市」機能を担えないため、大坂をあらためて商都として復興させることとしました。城下の復興は、幕府独力で復興にあたれないため、秀吉時代の町割計画を踏襲して、町人請負により責任を与え、堀（川）の開削と土地の嵩上げによる宅地造成などを図 E-5-6 のように進めたのでした。できた堀川は当時の小型船による主要交通輸送路となり、商業者の店舗・倉や各藩の蔵に直結し､各地から集めた米や様々な物資の搬出搬入に使われ、港湾とは異なる「水都大坂」の形ができあがりました。

「天下の台所」大坂の完成

江戸時代の幕藩体制は、幕府は藩には全く財政援助をせず、藩も幕府に定期的な支払いの義務を負わない独立した仕組みでした。藩の配置は、関ヶ原の戦いや大坂の陣の際に調略で味方に付いたに過ぎない実力のある藩を外様大名として、江戸から離れた地域に配置しました。さらに、幕府への不満の刃を懸念して、3 代将軍家光の時に「江戸参勤

交代制」で、大名は 2 年毎に、1 年間は江戸に滞在（参勤）し、翌年は領地に帰還（交代）を義務づけ、大名の正室と世継ぎは江戸に常住しなければならない大名の服属儀礼の制度を定着させました。この徳川時代の平和体制維持ができあがった結果、江戸の人口は増え続け、100 年後には人口 100 万人の大消費都市になりました。

増え続ける江戸の人口の消費に必要な食品や物資を受け持ったのは、商業都市として復興した大坂になりました。大量の物資は陸路では、労力と時間がかかるので、海運による船舶の輸送力でした。大量の菱垣廻船や、後に樽廻船が上方から荷を満載して運航しましたが、江戸からの下りの航路は運ぶものがありませんでした。

図 E-5-6　大坂城の城下の発展とともに開発された堀川

（出典：水都・大阪 HP）

参勤交代によって生まれたもう一つの副産物は、各藩邸が江戸で必要な食料や物資の購入や藩士の給与、施設の建設・維持費、あるいは幕府や各藩との間に必要となる分担金・接遇等の経費等の調達でした。その資金を捻出は、各藩で年貢で納められた米を大坂の米市で売却して調達しました。大量の米の取引は、米の質・量・価格の混乱を収めるため、幕府に願い出て認められた土佐堀川沿いの北浜の路上の「北浜米市」（当時の豪商淀屋が中心に始めた市）で、入札で売買されました。これは秀吉によって導入された米の物品貨幣の機能を果たすもので、これで徳川時代に「石高制」を普及させることができました。

売却で得た金を江戸の藩邸に送るのが第 1 部第 4 章で示した「江戸為替」の仕組みでした。藩の米蔵から米を買った大坂の問屋は江戸の藩邸に代金を支払い、江戸に運送した商品を購入した江戸の問屋は大坂に代金を支払うわけですが、両問屋の間に大坂と江戸の両替商が仲立ちをして、問屋と両替商の間に為替と手形が交換され、江戸の両替商から米の代金分が江戸の藩邸に支払われることになりました。それを可能にしたのは三井などの大手両替商の豊富な資金に裏打ちされた与信力によるものでした。問屋や仲買制度による流通機構が発達し、両替商金融による遠隔地為替等を駆使できる信用経済がやがて広域に広がり、こうした為替による決済は商品経済の拡大とともに発達していくことになりました。

全国の物資の集散場所となった大坂は、問屋・仲買は株仲間を組織し、流入してきた物

資は荷積問屋・船持問屋・荷受問屋・委託問屋・仕込問屋・加工問屋が荷主から委託された商品として加工したうえ、仲買を通じて他国の商人・小売商人からの注文や自己の裁量で問屋から商品を買い取り、小売商を通じて流通させました。

1672 年に河村瑞賢により西廻り航路が開発・整備され、山形の幕府天領の米が大阪の市場で売買されたことを皮切りに、日本海側に立地する諸藩の米も運ばれることとなりました。さらに 1687 年に、瑞賢は幕命で淀川河口の水流を妨げている九条島を真二つに分ける安治川開削工事を完成させ、廻船を直接堂島川や土佐堀川の沿岸に横づけを可能としました。ただし、西廻り航路で運んできた 700 石を超える船の場合、水深の関係で兵庫津で上荷船に積み換えさせられました。北浜米市は 1697 年に対岸の堂島川と土佐堀川に挟まれた開発された堂島新地（現在の堂島浜 1 丁目）に移され、「堂島米市場」が開設されました。川口新地や堂島新地は各藩の蔵屋敷が立ち並ぶ地域に変貌しました。さらに、1730 年、堂島米市場で行われる正米（しょうまい）商い（米切手を売買する現物市場）と帳合米（ちょうあいまい）商い（米を帳面上で売買する先物市場）を幕府は公認しました。堂島米市場で形成された米価は、飛脚や旗振り通信などによって江戸や地方の主要都市まで伝えられ、各地の米相場の基準となりました。わが国における公的な取引所の起源とされるとともに、後に世界の先物取引所の先駆けとして広く知られることになりました。物資の集散、問屋、仲買や小売商、為替決済、先物市場、こうして「天下の台所」大坂が確立しました。

北前船の起終点となった水都大阪

18 世紀の半ば過ぎから、幕府は、「石高制」の米中心の経済から、金融緩和による商業振興策に転換を図ったことで、農業での商品作物の生産が奨励され、収穫された作物を仕入れ、需要のある地域に搬送し、販売したのが買積船の北前船で、さらに、生産性を高める肥料や開発された農機具の仕入れ販売、正に現代の「商社」の機能を果たしたのでした。

千石積みで、荒波にも耐える 1 枚帆の帆走力のある弁才船は、風さえあれば櫓や櫂を使用せず水主等の乗員が少ない経済性を追求したものです。そのため、蝦夷地までの運航は、春に起点港を発ち、台風の季節までに瀬戸内海まで戻り、秋には終点港に着く 1 年に 1 往復の運航でしたが、船頭の寄港地ごとの市場を読む才覚で、「1 航海千両（約 1 億円）」の利益を産み出すことができたわけでした。詳細は第 1 部第 4 章を参考にして下さい。

春に出帆する北前船にとって、天下の台所になった大坂は寄港地で高く売却できる京都の工芸品や、薩摩の砂糖、土佐の紙・鰹節、阿波の藍、播磨の塩などの国々の特産物、そして大量に仕入れられる綿の古着等を仕入れ、安治川等に停泊させた空の船に積み込み、満潮から潮の引く干潮時に出帆することができました。瀬戸内海の寄港する湊では、特産物のほか日本海の荒波に船を安定させるために船底に入れる重量のある塩、米、味噌、御影石、瓦、陶器などを仕入れ積み込む必要がありました。一方で瀬戸内海は第 2 部第 3 回で説明しましたように 1 日に 2 回の干潮と満潮の反転があり、その潮の進む方向の特性を利用すれば、行きは安芸の鞆の浦（瀬戸内海の分水嶺）までは上げ潮に乗れば、帆も張らずに安全に進むことができました。鞆の浦からは下げ潮に乗れば赤間関（下関）まで行けました。島と島の間の狭域部では潮流が激しい特性があるので、進路と逆の潮の場合は「潮待」湊に停泊し、潮が替わってから出帆すればよく、停泊の期間中にも商いはできました。赤間関からは日本海の大海では、偏西風が吹いているので 1 枚帆にしっかり風を受けて快

調に進むことができます。しかし、天候の変化も厳しく、波や風が激しくなるので、主要な寄港地以外にも「風待」湊を掌握して、停泊を重ねつつ、湊湊で商いを続けて蝦夷地まで航海を続けることができました。

蝦夷地の春には「江差の五月は江戸にもない」と言われるほどニシンを求める北前船が集まりました。8 月までに、綿花の堆肥となるニシンカスのほか、塩鮭や塩鱈、ニシン、カズノコ、昆布、木材等を満載し、台風の襲来時期までには瀬戸内海に戻りました。終点となる大坂では全ての荷を下ろし（売却して）ますが、大坂の湊は水深が浅いため、荷の多い船は入港できず､兵庫津や安治川河口などで上荷船等に積み替えることになりました。空となった船は喫水線が浅くなるので、水深が浅くとも航行ができ、一方で「八百八橋」の下を通過するため、帆柱は横に倒して岸から引っ張り、淀川等の支流に船を係留し、船頭以外の水主等の乗組員は、そこから故郷まで徒歩で帰郷しました。係留しない船は、あらためて大坂で商品を買い受け、瀬戸内海や九州の湊を巡って商いをし、決まっている最終寄港地で係留させ、あるいは維持補修をして翌年の大坂からの出帆に備えました。

北前船にとって水都大坂が終着地点として利点があったのは、蝦夷地や日本海の湊で仕入れた物品を買い受けてもらえる経済力があったからと､河川に次の春まで係留する間に、船にとっての難敵である「船食虫」対策ができたからでした。

船食虫は白い紐状の虫で、錐(きり)を揉み込むように船の木材を食い入り、木くずを食べながら管穴を開け､管から海水を飲んだり吐いたりして酸素を摂取しながら木くずを食べ続け、やがて船体の強度を劣化させることになりました。その対策の一つが、塩分を含まない淡水の河川に長期係留し、窒息させて除去する。つまり、大坂には琵琶湖を含む範囲の水を大量に運ぶ淀川水系の河川が分流して流れており、潮の影響のない河川の上流部で係留して数ヶ月留め置くことで「船食虫」対策ができる利点がありました。もう一つは、「船蓼(ふなたで)」で船を浜に引き上げ、藁などを燃やした煙で船底に巣食う船食虫を除去する方法で、淡水の川が近くにない湊では、船蓼(ふなたで)の方法が採られました。

北前船の母港になれなかった水都大阪

北前船は湊湊で積み荷を売買するため、決まって寄港する湊のほか、天候や風の状況で急遽寄港する湊や浦があり、それぞれの湊は常に北前船が入港することを待ってその準備をしていました。湊には、問屋、荷宿、船宿、附船宿、船おろし場が生業をし、船が入港しない「船間」と言う不景気な状況が続かないことを願っていました。湊の先にはわずか数 m の高さの「日和山」があり、遙か遠くの船影を探し求めていました。日和山より、船影を見つけると、湊までの水先案内の附船が 1 艘漕ぎ寄せてきました。この附船は水主等が宿泊する附船宿の船で、船頭は附船宿の主人が迎えて望む宿に案内するのがしきたりになっていました。入港が決まっている湊では、船の帆印を見て、定宿となっている船宿の附船が番頭を乗せ、さらに酒樽を積んで、酒を船頭以下に振る舞って歓迎の意を示すのが常となっていました。

しかし､北前船の最終寄港地の大坂では､安治川河口などで上荷船等に船荷を積み替え、指定された問屋等に運ばれ、船を河川に係留させ、事務的な手続きを済ますと仕事の全てが終わることになります。買積船の船長にとって、春に始まり秋に終わる航海の最後の湊である大坂では、どの湊より温かく迎えられたいのに、大坂では業務を淡々と過ごすこと

で終わりになりました。この点で前回（第 4 回）で説明した兵庫津での接遇と違うところで、北前船の船頭にとって母なる港に水都大坂がなれなかった背景でしょう。

そのため大型船が停泊できない大坂を回避し、兵庫津の問屋が米穀や肥料などを取引するのも多くなっていきました。さらに、知多半島を母港とする買積船で広い商圏を持つ尾州廻船の内界船が、全国的な商品経済の広がりを背景に、瀬戸内で物資を高値で買い占め、新しい流通の担い手として登場し、兵庫津を西国最大の取引先としました。

このように、一般庶民の生活水準が向上し、高値でも購入する引き合いが流通の仕組みを変える背景になったわけです。一方で、最大の物量を取り扱う「天下の台所」大坂での流通の仕組みの変化に対応せず、幕府は江戸の消費生活を保つ視点を第 1 に考え、価格の安定を優先したため、次第に大坂へ流入する物資が減少し、幕藩体制の市場が解体していくことになりました。19 世紀になると、大坂で扱う瀬戸物で 7 割減、木綿や鉄で 6 割も減少しました。ここにも、大坂は北前船の母港としての地位を喪失していったのでした。

徳川幕府の統治の仕組みゆえ経済成長できなかった「天下の台所」大坂

1)徳川幕府の政治は進歩と独創を最大の罪悪として 300 年間抑圧し続けた。

家康は死ぬ直前に子の秀忠や幕府の要人たちに遺言として、「徳川の家のことは全て三河の通りにせよ」を残しました。それは幕府の政治を三河松平郷の制度の通り、すなわち譜代の者が家政を担当し、閣僚を老中といい、局長級を若年寄という職名をそのまま使って、日本国の政治をさせました。三河松平郷は姓を松平から徳川に代えた所で、1566 年当時 29 万石でした。秀吉から関八州（関東 8 カ国）への国替え時には 240 万石、豊臣家を消滅させた際には 400 万石の日本一の大大名になっても、農村型の統治の仕組みを変えず、いかに新しいことや独創を避けて国を 300 年間も維持したのは異常でした。

大坂の統治も復興が終わった 1615 年に幕府直轄地にした際には、大坂城下の監督と西国大名の動静の監察を職務とする大坂城代を置きました。大坂城代は幕府内の老中・京都所司代に次ぐ重職で、譜代大名の内、5~6 万石の中から選び、明治まで再任を含め延べ 70 人（平均在職 3 年 7 ヶ月）が就きました。在職期間が短く前職を踏襲したに過ぎず、ほとんど新しい仕事はできなかったといえるでしょう。

2)「石国制」と株仲間制で民間の経済の成長を抑制した。

信長や秀吉は経済に力点を置き、楽市楽座で地域商業を活性化し、さらに国家貿易を考え、国家そのものを富ましめようとしました。しかし、家康が支配した地域は京都や大坂から離れ、都市の活動を知らないで、その経済観は地方の小さな農村領主の領域から一歩も出ず、徳川政権は成長を前提としない財政体制となってしまいました。

秀吉は商業に力点を置きましたが、流通する貨幣が不安定であったため、米を貨幣とする仕組みで「石国制」で代替させようとしました。しかし徳川幕府は、金山と銀山を直轄化し金貨や銀貨の貨幣として流通させましたが、財政の基礎を米 1 石は 1 人が 1 年間に消費する単位とし、生産手段を持たない武士の（食費や生活費に充てる）給与の実質を下げない「石国制」を基準とする政策を採りました。豊作になれば、流通する米の価格が下がるので、酒造りを奨励したり、冷害や災害に備えて各藩に備蓄させる等で調整をしました。元禄期に米の生産性が上がった際には、農家は労働力を確保するため子供が増え人口が増加しますが、それにより 1 人あたりの米の消費量を一定化したため、江戸時代の人口は

3,000 万人で均衡したのもそのためです。勃興してくる商業経済に対抗するのに利用したのが「株仲間」制でした。江戸や大坂の大消費地の商業者に加入を限定し、特別の権利を付与する代わりに税に匹敵する冥加金を幕府に納めさせる制度です。これにより新たな商業を目指す株を持たない新規の業者の活動を民間ベースで制限し、需要が増えて価格上昇があっても、役人からの指示で価格変動を抑制することに活用できました。その結果、豪商と呼ばれた商業者に利益が集中し、幕府や藩は借財(大名貸)が増えましたが、時として上納金を豪商や株仲間に要求したり、淀屋のように難癖を付けて廃業に追いやることで、他に見せしめを示し、庶民の不満の代償としたこともありました。そして、天下の台所である大坂で米価や物価の値上がりを抑制することで、江戸の価格を安定させることにつながりましたが、江戸と大坂での民間の経済の成長も抑制してしまったのでした。

信長や秀吉が国家貿易を考えましたが、幕府は鎖国政策で門戸を長崎等に限定し、幕府は利益を独占しましたが、輸出がなければ工業は育たないし、輸入がなければ消費が増えないわけで、ひたすら「石国制」を守る、すなわち節約主義を維持することで、残念ながら国富を増やすことなく、そのまま幕末まで政権を維持し続けることになりました。

3)北前船が商品経済の勃興による市場経済の担い手として機能した。

18 世紀後半からの商品経済市場の拡大の波を受けて、北日本から西日本と江戸東海地方を結合する流通を担った北前船や尾州廻船の内界船等は、価格を抑制する「天下の台所」大坂とは距離を置ことになりました。その結果が、最も「民」らしい形の市場経済機能を担い、北前船は「動く総合商社」として「1 航海千両(約 1 億円)」の利益を実現し、寄港する湊や町は、幕府の狙いとは異なる資本主義型の産業を育み、明治維新後の近代化の礎になっていったのでした。

おわりにー結局「港都」になれなかった水都大坂

大坂は豊臣政権が滅びた後の大坂の復興で、運河網が巡らされ、「水都」大阪が生まれ、海運による物資の全国からの集散で「天下の台所」となり全国の市場の中心となりました。

しかし、広大水域の淀川が運ぶ土砂で海岸線は前進を余儀なくされる運命にありました。北前船の母港にはなれず、徳川幕府は国家貿易には消極的で、水都大阪をその中心にはなりませんでした。明治開港では兵庫が開港となり、結局「港都」にはなることができなかったのでした。やがて鉄道やトラックが輸送を担い、「水都」の機能は衰退し、運河や堀川は埋め立てられ、現在は道路として「商都」大阪を支えることになりました。また、北前船は鉄道網の整備や汽船の就航で、明治の半ばにはその役割を終えることになりました。

＜参考文献＞

・大阪歴史文化研究会、『大阪ぶらり古地図歩きー歴史探訪ガイド』、メイツ出版、2020 年
・小林昌二編、『日本海域歴史大系　第 4 巻』、誠文堂出版、2005 年
・司馬遼太郎、『覇王の家　上・下』、新潮文庫、2002 年
・司馬遼太郎、『菜の花の沖　2』、新潮文庫、2015 年（第 15 刷）
・上念司、『経済で読み解く日本史 2　安土桃山時代』（文庫版）、飛鳥新社、2019 年
・長尾義三、『物語日本の土木史』、鹿島出版会、1985 年
・藤本篤他・前田豊邦・馬田綾子・堀田暁生、『大阪府の歴史』、山川出版社、1996 年